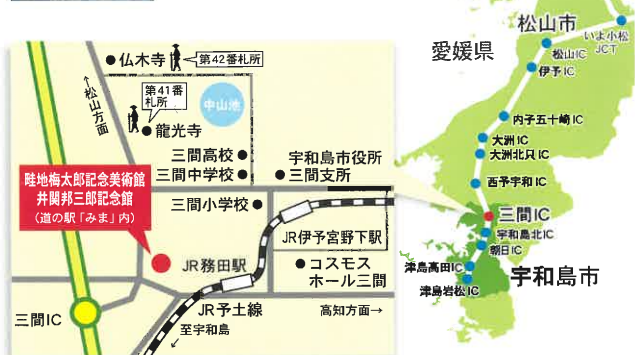


施設のご利用案内

- 所在地** 〒798-1114
愛媛県宇和島市三間町務田 180-1 (道の駅「みま」内)
TEL・FAX 0895-58-1133
E-mail azech-mui@city.uwajima.lg.jp
- 開館時間** AM9:00～PM5:00 (入館受付 PM4:30 まで)
- 休館日** 火曜日 (祝休日の場合は、その直後の平日)
1月1日
- 入場料金** 大人 300円 (200円) 大学・高校生 200円 (100円)
※()内は 20名以上の団体料金、中学生以下は無料
65歳以上の方、身体などに障がいがある方は上記料金の半額

アクセスマップ



畦地梅太郎記念美術館・井関邦三郎記念館へのアクセス

- 〈車〉 松山自動車道三間ICから …… 約1分
 〈JR〉 JR宇和島駅から予土線乗車 務田駅下車 …… 徒歩約8分
 〈バス〉 宇和島自動車三間方面行 務田駅下車 …… 徒歩約7分

館内ではご観覧の際、下記の点につきまして、なにとぞ協力お願い申し上げます。

- 撮影禁止
- 携帯電話使用禁止
- メモ等は鉛筆もしくはシャープペンシルをご使用ください。
- 飲食禁止
- 作品には触れないようにしてください。(作品保護のため)
- お話は小さな声でお願いします。

そのほか、ご不明の点等ございましたらお気軽にお近くのスタッフにお尋ねください。



邦三郎の生家・井関農具製作所復元模型



全自動粉すり機第1号(複製)



邦三郎の功績 (井関邦三郎が開発した農業機械展示)



パネル



井関邦三郎記念館

ISEKI KUNISABURO MEMORIAL HALL
全自動粉すり機をはじめトラクタ、コンバイン等を展示し、井関邦三郎の農機具に懸けた人生の軌跡に触れることができます。



アトリエ再現 (梅太郎の作業場再現)

梅太郎を知る



作品展示



槍ヶ岳



火山のあと

多色木版画の手法を知る



グッズコーナー



※グッズコーナーはご自由にご覧頂けます、お気軽にお入り下さい。



裏石鎚山



白い像

畦地梅太郎とかかわりのあった同郷の版画家

中尾 義隆 (なかお よしたか)

人間の形態を単純化して力強く組み立てる中に、叙情的で知性を感じさせる作風は国際的にも評価された。畦地梅太郎とは「一木会」で共に活動するなど深い交流があった。国画会会員、日本版画協会会員。



畦地梅太郎記念美術館

AZECHI UMETARO MEMORIAL MUSEUM
畦地梅太郎の作品を中心に、企画展も盛り込みながら3、4ヶ月毎に展示替えを行っています。木の香り漂う館内でゆっくりと芸術に接する事ができます。





畦地梅太郎 (あぜち うめたろう)

版画家。1902年(明治35年)愛媛県北宇和郡二名村(現在の三間町)に生まれる。10代で上京して油絵を自修、やがて創作版画家として山や山男をモチーフに独自の世界を確立する。生あるものすべてに愛のまなざしを注いだ畦地梅太郎の詩情豊かな版画作品は多くの人に親しまれ、戦後は最もポピュラーな版画家の一人として活躍、サンパウロ・ピエンナーレをはじめとし、国際的にも幅広い活動を見せた。また、その人柄から生まれた優しさとぬくもりのある随筆集・画文集には、多くの愛読者をもっている。

1976年 日本版画協会名誉会員。1999年(平成11年)96歳の生涯を閉じる。



白い山男

畦地梅太郎記念美術館 AZECHI UMETARO MEMORIAL MUSEUM



全自動刈り取り機第1号(複製)

井関邦三郎記念館 ISEKI KUNISABURO MEMORIAL HALL



井関 邦三郎 (いせき くにさぶろう)

総合農機メーカー創業者。1899年(明治32年)愛媛県北宇和郡三間村(現在の三間町)に生まれる。当初、郷里で大野式除草機の販売を始めていたが、後に高性能の全自動刈り取り機の製造・販売を松山で開始し、井関農機の基礎を作った。戦後の農業機械化ブームに乗って、耕耘機・コンバイン・トラクタ・田植機を次々に開発して、井関農機を、わが国を代表する総合農機メーカーに育てあげた。

また、愛媛県工業クラブ会長・松山市商工会議所会頭・愛媛県経営者協会会長・済美学園理事長などを歴任し、地域の発展に貢献した。その他、萬翠荘の菊花展・バラ展や囲碁の普及にも尽力。

1970年(昭和45年)71歳の生涯を閉じる。

邦三郎の経営の考え方

私は機械を造る上において一つの信念をもってまいりました。それは、『使う身になって造る』ということでした。この方針で研究には常に意を注ぎ、より優秀で、より低廉にと心がけていたので、商売をするには、どうしてもこういった心構えが大切で、そこに信用が生まれ、事業の発展が約束されるのではないかと思います。

山に帰る心
いつも郷里の山河のたたずまいが頭の芯にしみこんでいたものか、いつのまにか、わたしは、山を歩き山の版画を作るようになった。戦後は、単なる山の景色を描くことのむなしさを思うようになり、私の心の山男を描き版画に作るようになった。

